ISSN　1347-0728

北九州市立大学

文　学　部　紀　要

第 83 号

── 目　　次 ──

The Grapes of Wrath における女性描写の特質について
… 前　田　譲　治

北九州市立大学文学部
比較文化学科
２０１４

The Grapes of Wrath における女性描写の特質について

前 田 譲 治

要約

『怒りの葡萄』において、非常時の男性が、否定的色彩が際立った幼児退行状態に陥り、生産性の発揮が不可能な状態に陥る様子が多く描かれている。対照的に、女性は非常時も一貫して通常と変わらぬ生産性を発揮し続ける様子が描かれている。女性に対する男性の能力の優越性を無条件に認める暗黙の秩序の存在が描かれている事実を視野に入れると、先の男女の弁別的描写は、暗黙の秩序に対する批判を企図したものと判断できる。とすれば、女性描写は、本作の中核をなしている、様々な社会秩序批判の一端を担う形で導入されている。加えて、家庭外の社会性を伴う事象に関しても、一貫して男性の無力さと女性の生産性とが対照的に描写されている。この在り方は、女性の存在の場を家庭内の営為に限定する作品執筆当時の現実の社会の暗黙の了解をも批判しているといえる。移民の死を招来する社会秩序に対する批判が作品の中核を構成する中、女性の位置づけに関連した現実の社会秩序も見落とすことなく批判の俎上に載せた点に、現実を支配する先入観に囚われることなく女性を描こうとする革新的な作者の姿を指摘できる。

キーワード

John Steinbeck、Ma Joad、Rose of Sharon、社会制度、法律、警察

Introduction

John Steinbeck の *The Grapes of Wrath* において提示されている女性像に関しては、既に多くの論考が展開されてきている。例えば、『怒りの葡萄』の女性像の特質に全体が焦点を当てた論考においては、スタインベックは女性に対して、“ ‘happy-wife-and-motherdom as the central role for women” (Mckay 66) という位置付けを行っていると解釈されている。他方、Joan Hedrickは、作中で女性に関して、“the nurturant, milk-producing woman” (135)、“women’s ability to absorb tragedy” (136) 、“the rock that gives the family strength” (126) といったあり方に焦点が当てられている点、男女の関係が “mother-child bond” (140) に支えられる点などを指摘し、それらの女性描写が現実味を欠いている点を痛烈に批判している (143)。あるいは、Mimi Gladstein は、『怒りの葡萄』の女性像の特徴として、“mothering” (118)、“enduring matriarch, indestructible woman” (124)、“earth goddess” (125)、“the special indestructibility” (125)、といった在り方を指摘している。さらには、スタインベックの複数作品を視野に入れつつ、

女性の特質に注目して、女性を幾つかのカテゴリーに分類しようとする試みも頻繁に行われている (Lisca 207, Ditsky 4-5)。しかしながら、女性像の特徴が、作品の全体構造や重要な主題とどのように連動しているのかという点には殆ど考察がなされていない。先行研究においては、女性描写の特質の明確化という枠内でのみ議論が展開するケースが大半である。そこで、本稿においては、『怒りの葡萄』の全体的なテーマと関連した女性描写の特徴に特に焦点を当て、その二つの要素の関連性、連動性を明示したい。この視点から、本作における女性描写の本質を明確化することを最終目的とする。

I

作品冒頭において、舞台となっているOklahomaに砂嵐が生じたため、農夫の男性たちは日常的に行ってきた農作業が全く行えなくなる。無名の登場人物の描写を通して農民や移民全体の動きを俯瞰する機能を有する中間章において、そのような事態が起こった際の男性の行動は、“The men sat in the doorways of their houses; their hands were busy with sticks and little rocks” (7).、と描かれている。他にも類似した農民男性の動作の描写が、“The squatting tenant men nodded and wondered and drew figures in the dust . . . ” (43).、あるいは、“The tenant men squatted down on their hams again to mark the dust with a stick, to figure, to wonder” (46). という形で、後続する別の中間章においても反復されている。砂嵐による生活環境の激変の結果、男性たちは、従前の生活様式を維持することが不可能となり、無意味で非生産的な行動を強いられ、彼らが完全に無力化する様子が繰り返し描かれている。

他方、同一状況下における子供の動作は、“The children stood near by, drawing figures in the dust with bare toes . . . ” (6). と描かれている。このように、子供と成人男性の行動の同一化を描くことによって、男性の存在様式が幼児的次元に退行する様が暗示されている。成人男性と幼児との類縁性が描きこまれている点は、特に注目すべき点で、さらなる考察を要すると考えられる。なぜならば、本作中に登場する子どもは、個別的に描かれている、Ruthie Joad、Winfield Joad 共に貪欲かつ粗暴で攻撃性に満ちた存在として一貫して描かれており、肯定的なイメージが子供に対して配置されることが絶無だからである。そのような描写の最も顕著な例は、以下のとおりである。ルーシーは、逮捕されないように家族から離れて一人身を隠している兄のTom Joadが殺人を犯した事実を、ルーシーを激しく殴打した他の子どもに誇示する。その結果、トムは大変危険な状態に置かれるのだが、その期に及んでも、ルーシーは殴打されたことに関する屈辱感と怒りのみに囚われ、トムの状況を配慮する感覚は絶無である (565)。弟のウィンフィールドも、ルーシーが致命的な過誤を犯した結果、親から懲罰を受ける可能性が高まった事態を歓迎し、また、ルーシーを嘲笑することに囚われている (565)。さらに、ルーシーが他の子どもから激しく殴打されたのも、

ルーシーが飢餓状態の他の子どもの羨望の念を喚起すべく駄菓子を他の子どもの面前で誇示的に食したことが祟って、他の子どもから駄菓子を奪い取られ、彼女がそれを取り返そうとした結果である。さらには、父親と母親が意見の相違ゆえに、相互の暴力行使にすら至りかねないレベルの、極めて深刻な対立状態に陥った際に、ルーシーは、そのような二人のやり取りを見て爆笑している(230)。加えて、Jim Casy が逮捕された際に無為であったことに対する罪悪感に苛まれ懊悩するUncle Johnを目撃した際に、子ども二人の反応は“[T]hey shrieked with laughter”(369). と描かれている。このように、他者の苦悩に対する完全な無関心と冷淡さを特徴とする子どもらとは対照的に、母親は“‘Poor John . . . ’”(368). と他者の苦悩への憐憫の情を露わにする。このように、ジョード家の子どもたち、さらには、二人の子どもが接する他の子どもも、純粋なエゴイズムによって専ら言動が支配される在り方が反復的に描かれている。

フーバービルにおける飢餓状態の無名の子どもたちの描写に注意しても、食欲という原初的な欲望によって言動が直接的に支配される存在として描かれている (344-45, 350-52)。それらの飢餓状態の子供たちに対する、ルーシーとウィンフィールドの反応は、“Ruthie and Winfield stood inside the circle, comporting themselves with proper frigidity and dignity. They were aloof, and at the same time possessive. Ruthie turned cold and angry eyes on the little girl”(345). と描写されている。二人の子どもは、飢餓状態にある同年代の子どもに対して、強欲、冷淡さのみを示しており、何らかの形で憐憫の情を示す母親やジョン伯父といった大人とは対照的である。このように、子どもの行動様式の本質がエゴイズムに存する在り方に焦点を当てる作品の方向性に揺らぎはない。

国営キャンプで生活する子どもたちに目を向けると、子どもたちは場を支配している、規則を重んずる空気に感化される形で、秩序の遵守を心がける傾向が強く、粗暴性とは無縁であり、作中で最も肯定的な色彩と共に描かれている。そのような子どもですら、ゲームへの割り込みを強行しようとするルーシーを一致して黙殺することにより、彼女を“. . . Ruthie wept miserably”(434). という精神状態に追い込んでいる。それらの子どもたちは、ルーシーに肉体的暴力は行使しないが、忌避的態度を一致して取ることによりルーシーの精神を激しく棄損している。この状況の発端は遊戯の順番待ちを無視して割り込みを図ったルーシーのエゴイズムにあるとはいえ、子どもたちのルーシーに対する対応の辛辣さは、子どもが遊ぶのを見守っている年長の女性により、“‘You was mean yourself . . . ’”(434). と批判される次元なのである。このように、秩序だった行動様式を取る子どもでさえ、否定的に描かれる行動様式を免れない。

先に確認した、男性が続ける幼稚な手遊びは、従前は行えていた手作業に対する彼らの渇望感の表出である。しかしながら、本作固有の子どもの描写基調の中にあっては、手遊び描写を通しての、男性と子どもの各表象の連結は、極めて否定的な色調を男性に対して賦与する結果となる。このよ

うな作品の方向性は、女性描写と男性描写とを対置することにより、さらに明確化する。この点について以下に考察したい。

砂嵐が到来し生活環境が激変した後の、中間章の女性の行動の様子は、“The women went into the houses to their work . . .” (7). と描かれている。女性たちは男性とは対照的に、生活環境の激変が生じても、彼女らの行動様式に影響が及ぶことはなく、平時に有していた行動の生産性を持続できている。特定の一家族である、ジョード家に焦点を当てた、所謂、物語章に目を移しても、重要な決定を行うための家族会議の最中の Ma Joad に関して、以下の描写が見られる。

> Ma left the group and went into the house, and the iron clang of the stove came from the house. . . . Ma went to the house again. There was a screech of a lantern hood and the yellow light flashed up in the dark kitchen. When she lifted the lid of the bog pot, the smell of boiling side-meat and beet greens came out the door. (138-40)

上記のとおり、家族全員が注意を傾注せざるを得ない重要な家族会議の最中においても、母親は、家族に対する貢献活動が中断することはなく、生産性を発揮し続けている。一方で母親は、会議において男性同様に自己の意見を主張し、会議が下す判断を左右しており、この点で、彼女が発揮する生産性は倍加されている。特に、積荷が過重状態のトラックに、家族の一員ではないケーシーの同乗を許すか否かの判断に関して、同乗を拒否すべきとする Pa Joad の主張を母親は話術の巧みさにより論破している。最終的には、母親が主張した通り、ケーシーは同乗を許可されることとなるのだ。会議における判断に対する影響力の点においても、女性の生産性が男性を圧倒する様子が描かれている。妊娠中のために活動に制約が伴いがちな娘の Rose of Sharon に関しても母親と同じような描写が、“Ma and Rose of Sharon washed up the dishes and piled them on the table” (142). という形で見られる。このように、女性に関しては、行動の生産性の継続性に焦点が当てられることが多く、男性に頻繁に見られた幼児性を帯びた行動の描写が絶無なのである。対照的に、その直前には、二男 Noah に関する、“Noah picked his teeth thoroughly with a broom straw” (142). という描写が見られ、やはり、男女の行動の生産性の対照性が際立たされる構成になっている。また、同一場面において父親に関しては、“Pa walked around the truck, looking at it, and then he squatted down in the dust and found a stick to draw with” (136).、さらには、“Pa dug his stick into the dust and rolled it between his fingers so that it bored a little hole” (138). という描写を通して、幼児退行的行動を取っていることが強調されている。中間章の男女の弁別的描写と完全な相似形を形成する形で、母親（女性）と父親（男性）

の生産力の対照性が描き出されている。このような女性の位置づけは、ジョード家を描いた他の場面においても確認できる。

国営キャンプに宿営したジョード家は、カリフォルニアに到着後初めて、対人関係を含めて快適な生活環境を享受できる。しかしながら、国営キャンプの近辺では生存の前提となる仕事を見つけることができずに、食料等の蓄えが徐々に尽きていく。母親はその現実を直視し、快適な生活を享受できる国営キャンプを離れ、別の場所で仕事を探すことを家族に対して主張する。他方、男性は快適な国営キャンプの生活環境を喪失することを嫌って、現実的な決断を下しかねないでいる。加えて、国営キャンプからの移動を母親に促された際の男性の反応は、“They looked at the ground. Pa cleaned his thick nails with his pocket knife. Uncle John picked at a splinter on the box he sat on. Tom pinched his lower lip and pulled it away from his teeth” (478). と描かれている。これらの描写は、再度、男性の行動の非生産性と幼児性を強調している。これらの描写は、男性の合意を最終的に得られる事実から妥当性が自明である、母親の主張の展開の直後に登場するため、やはり、男性と女性の行動の生産性の対照性を際立たせる効果を挙げている。さらに、母親は、家族が今後どのような選択を行うべきかという重要な案件に関して、意見が異なる父親を論破するのと並行して、生活に不可欠なお湯を調達し、“Ma's hands were busy in the water . . .” (481). という形で、食事の後片付けという生産的活動も行っている。その結果、先に眺めた家族会議の場面と同様に、母親の生産性は倍加されている。この在り方も、男女の各々の行動が有する有意性の格差をさらに拡大する。このように、同様の構成が反復されている点は、作者の創作姿勢の一貫性を物語っている。

ジョード家が国営キャンプから個人経営の Hooper 農場に移動した直後に、トムは警備員の一人を殺害する。その結果、トムの家族は、彼が殺人を犯したことに関する事後策を、家族会議で協議することになる。その会議の最中、母親は協議に参加し意見を陳述すると同時に、以下の引用が示す通り、通常時に行っているのと同様の活動も継続している。

> She made her dough, put a pot of coffee to boil. . . . Ma worked at the stove. Her head wad half turned to hear. She put grease in the flying pan, and when it whispered with heat, she spooned the dough into it. . . . Ma turned the dough and stirred the coffee. . . . Ma lighted the lantern and hung it on a nail. She fed the fire and poured cornmeal gradually into the hot water. (533-40).

このように、男性の活動の余地が完全に奪われるほどの大事件が突発的に生じても、母親が通常発揮している生産性は消失しない様子が繰り返し強調されている。否定的な色彩が基調の子どもと行

動様式が一致することが強調され、否定的な色彩が意図的に賦与されていた男性とは正反対に、環境如何に関わらず、女性は常に有意な行動を継続できる存在として肯定的に描かれている。このような形でスタインベックは、女性の行動様式に男性のもの以上に積極的な価値を見出している。

II

次に、以上に明らかになった、女性と男性の間の弁別的描写が、作品が醸成する世界観とどのように連動しているかを考察することにより、男女の描き分けの背後に潜んでいる作者の意図を以下に明確化したい。この点を論考するにあたって最初に注目すべきは、ジョード家の人々の行動が、彼らが住んでいる地域全体を暗黙の内に支配していると見られる因習や階層性によって支配されている事実が、繰り返し描かれている点である。その中に、男女の上下関係に関する因習が多数、描きこまれている。例えば、“Ma looked to Tom to speak, because he was a man, but Tom did not speak. She let him have the chance that was his right, and then she said . . .” (127). という描写からは、年齢に関係なく、無条件に男性に対して発言の優先権が与えられる階層性の存在がうかがえる。さらに、“Grampa was still the titular head, but he no longer ruled. His position was honorary and a matter of custom. But he did have the right of first comment, no matter how silly his old mind might be” (137). という描写も、やはり、男性に発言の優先権が自動的に与えられる階層性の存在を物語る。さらにはジョン伯父に関する、“Had he not been fifty years old, and so one of the natural rulers of the family, Uncle John would have preferred not to sit in the honor place beside the driver. He would have liked Rose of Sharon to sit there. This was impossible, because she was young and a woman” (130). という描写も、既出のものと同類の、男女間の因習的な上下関係の存在を示唆している。

以上の通り、男性を女性の上位に位置付ける階層性が、因習としてジョード家の人々の思考様式を強固に支配している様子が描かれている。そうであるとすれば、ジョード家の人々の無意識裡の因習への盲従に対するアンチ・テーゼを形成することを意図して、作品の男女の弁別的描写は展開されていると判断できる。男女の弁別的描写は、因習・習慣を、現実を見据えた上での正当な判断に貫かれたものではない思考様式と位置付け、その不毛性を示唆する方向性を有している。この方向性は、ケーシーの発言によっても際立たされている。ケーシーは、ジョード家が移民の準備で多忙を極める中、母親に代わって豚肉の処理を行うことを母親に申し出る。その申し出に対して母親は、“ ‘It’s women’s work . . .’ ” (146). と反応し、暗黙の秩序に盲従しつつ、当初は難色を示している。そのような母親に対してケーシーは、“ ‘They’s too much of it to split it up to men’s or women’s work’ ” (146). と説得する。このケーシーの発言は、旧来の暗黙の秩序に盲従

することの無意味性と、人々は刻々変化する現実に適合すべく行動様式を変えるべき点を、直接的に伝えている。上記のような形で、因習的思考に束縛されることの否定的側面を、作品は様々な視点から提示している。このような作者の姿勢は、実は、男女の弁別的な描写とは一見無関係に見える、作品の別の重要な側面とも連動している。この点に関して以下に考察したい。

因習、生活習慣は、無形かつ不文律でありながらも遍くジョード家の人々が行動規範として意識し、老若男女を問わず一家全員の行動様式を強く支配しており、この点で、皆を支配する既成秩序と位置付けることができる。この作品には、この他にも、強制力の形で実態を伴った、様々な既成秩序が登場する。それらの描写の在り方を考察したい。最初に、強制力や罰則を伴った、明文化された形の既成秩序である法律が、どのように描かれているかを眺めたい。まず、トムは殺人を犯した結果、一定期間服役した後に仮釈放されている。しかし、仮釈放には、無断で州の外に移動しないという条件が付されており、それを破ると法律の規定を犯したことになり、再度、トムは投獄の憂き目を見ることになる。しかしトムが州内にとどまり続けた場合、家族と離れ離れになり、砂嵐の到来によって無人化してしまった近隣には職もないためトムは餓死を強いられる (182)。このように、既成秩序たる法律がトムの生存権を否定する現状が描かれている。刻々、状況が変化する現実に硬直化して対応ができない、法律の不備が指摘されている。

さらには、故郷で生計を立てることが不可能となったジョード家は仕事を求めて、一路、カリフォルニアに向かうが、道中で高齢の祖父が死去する。ジョード家は僅かな蓄えを頼りにカリフォルニアへの移動を敢行しており、最大限の倹約を強いられる状況にある。それにもかかわらず、法律に従って祖父を埋葬すると、40ドルという一家にとっては致命的な負担となる出費を強いられる (190)。当然、法律を完全に遵守すれば、カリフォルニアには到着できない。この状況は、家族が生存する余地の消滅を意味する。つまり、法律への盲従が、人間の死に直結する在り方が再度、描かれている。このような立場に置かれたジョード家は、やむなく、法律に違反する形で祖父を土葬にする。その際のジョード家の人々は、違法行為を行っているという罪悪感と恥辱感に駆られるばかりである。さらには、違法な土葬を行ったがゆえに、祖父を埋めた場所の地表を墓の形状に加工出来ず、埋葬の痕跡が人目に付くことがないように地面を平坦にしないとならない (197-98)。結果的に、ジョード家は、埋葬されている祖父の死体の直上の地面を足で踏み固めるという、肉親に対する冒涜的行動を強いられる。以上の諸描写を通して、法律は無条件に妥当性を持つのではなく、その硬直性ゆえに社会情勢の変化に即応できず、理不尽なものになりうる可能性が暗示され、その効用の限界が暗示されている。

法律の問題点に焦点を当てた描写は他にもある。例えば、 ジョード家が移民の道中で野宿を試みた際に、野営地の所有者が口にした、“‘Deputy sheriff comes on by in the night. Might make it tough for ya. Got a law against sleepin’ out in this State’” (254). という発言か

ら、屋外での就寝を禁じた法律が特定の州には存在することが分る。土地の所有者は、この法律を悪用して、カリフォルニアに向かう道中での野宿を余儀なくされている移民から理不尽な形で金銭を徴収している。つまり、法律の存在が、困窮の極みにある移民からの搾取を可能とする在り方が描かれている。さらには、カリフォルニアにおける別の法律に関して、“‘They's rules—you got to be here a year before you can git relief. They say the gov'ment is gonna help. They don' know when'” (590). と記載されている。法律の、このような在り方ゆえに、餓死寸前の人々が放置され続ける状況が生まれている。激変した移民の生活とは無関係に、法律は硬直化したまま不変であり、結果的に、移民の生存を脅かす状況が描かれている。作品には、法律以外の既成秩序の構成要素として、法律と不可分の関係にある様々な社会制度が登場する。次にそれらの描写基調を確認したい。

まず、牢獄の描写を眺めたい。牢獄の重要な存在意義は、常識的に判断して、法律という既成秩序に反した囚人を収監し、法律の定めを逸脱しない行動様式を身に付けるように囚人を矯正することであるだろう。この点で、監獄は既成秩序と密接な関係にある。しかしながら、殺人罪で服役し、仮出所した直後のトムの、“‘I'd do what I done－again . . .’” (35). という発言から分るとおり、入獄前後で、トムの殺人に対する認識の在り方は変わっていない。トムは獄中において、自分が犯した罪に対する悔悟の念を覚えるにも至ってもいない (240)。実際に、仮出所状態のトムは、仲間のケーシーが殺害された際に、反射的にケーシーを殺害した男性を殺害している (527)。このように、監獄はトムを殺人に関する認識の面で更生させる機能を果たしておらず、その本分を全うできない様子が継続的に描かれている。さらには、トムの獄中経験に関する、“‘You can't go thinkin' when you're gonna be out. You'd go nuts'” (123). という発言を通して、収監が囚人の精神性を劣化させる可能性を孕んでいる点も描かれている。このようなトムの視点は、“‘Look here, Al, I'll tell ya one thing－the jail house is jus' a kind a way a drivin' a guy slowly nuts. See? An' they go nuts, an' you see 'em an' hear 'em, an' pretty soon you don' know if you're nuts or not. When they get to screamin' in the night sometimes you think it's you doin' the screamin'－an' sometimes it is'” (241). という形でも反復されており、監獄は人間の精神状態を悪化させる場として繰り返し設定されている。加えて、Muley Graves の従兄が監獄において劣悪な扱いを受けた点も描かれている (73)。次いで、一時的に投獄されていたケーシーも獄中で腐敗した食物を支給された経験を語っており (522)、獄中における囚人の非人間的な扱いも反復的に強調されている。既成秩序と表裏一体の関係にある牢獄に関しては、囚人に対して悪影響を及ぼし、所期の目的と正反対の結果をもたらすという否定的側面があげつらわれている。

次に、法律に違反した人々を逮捕したり、極端な場合には射殺したりする権力を賦与されており、

やはり、既成秩序と不可分の関係にある警察や保安官補の描写に目を向けたい。まず、警官は、移民に対して法律を根拠に、理不尽な処遇を繰り返し行う点に焦点が当てられる。例を挙げると、保安官補は、フーバービルにおいて、果実摘みの仕事を行う移民を募る地主の代理人に用心棒よろしく付き従い、特定の個人の利害に与している。この場面において、移民の労働力を搾取しようとする大地主の姿勢に関して強い警戒心を露呈するFloyd に対して保安官補は、“‘Hmm, seems like I have. Las’ week when that used-car lot was busted into’” (359). と述べ、大地主の利益に反する主張を行う無実の男性を、冤罪の捏造により逮捕しようとする。さらには、フロイドが居住していたキャンプを、法律に則ることなしに、“a bunch of guys . . . maybe with pick handles” (360) を動員して、違法に焼き払おうとする。さらには、大地主に不利益をもたらす国営キャンプを、違法な活動は一切行われていないにも関わらず、保安官補は大地主の利益を代弁する形で、策略を弄して閉鎖に追い込もうともする (468-69)。以上の通り、保安官補は大地主と一貫して癒着しつつ職務を遂行しており、地主に買収されていることを強く疑わせる叙述が連続している。

冤罪を着せて逮捕しようとしたフロイドが逃走を図った際に、保安官補は即座に彼に対して発砲し、流れ弾によって、その場に居合わせた無関係の女性に重傷を負わせている。その事態に対する保安官補のコメントは、“And he said, a little proudly, ‘Jesus, what a mess a .45 does make! They got a tourniquet on’” (364). というものである。この発言の中の “proudly” という単語の使用からは、彼らが過失により無実の人間に重傷を負わせた事実に対する罪悪感の欠如と、その人物の苦痛に対する同情心の不在とが読み取れる。ここには、警察権力の非人間性を示唆する作者の姿が指摘できる。同様の作者の姿勢は、“Then sheriffs swore in deputies in droves, and orders were rushed for rifles, for tear gas, for ammunition” (591). という、餓死寸前で食物を盗む以外に選択肢がない移民の殺害を企図する保安官の描写にも読み取れる。このような警察権力は、トムの視点を通しては、“‘They’re a-workin’ away at our spirits. They’re a-tryin’ to make us cringe an’ crawl like a whipped bitch. They tryin’ to break us’” (381). と位置付けられている。別の場面において、保安官補は母親をオーキーという蔑称で呼び、彼女に屈辱感を味あわせている (291)。彼らは、移民たちの精神に悪影響を及ぼす存在として、繰り返し描かれている。さらには、警官が介入することを許されていない国営キャンプが、最も秩序だった場所である事実を前提として、ケーシーの “‘Cops cause more trouble than they stop’” (524). という判断が説得力を有する形で下されおり、警察権力に伴う不備が様々な形態で描かれている。既成秩序の護持を司る監獄と警察は、法律により絶対的な権力を賦与された結果、それ自体の在り方が批判される事態を免れたことが原因で、省察不在の横暴に至り、社会において害悪を生み出していく過程が批判的に描かれ、問題視されている。

以上の通り、作者は、人間を不合理な形で支配する有形、無形の多種多様な権威的存在、既成秩序を、作品の中で徹底的に批判しており、この点は間違いなく作品の最重要テーマの一つといえる。このような作品の重要な局面と、既成秩序に異議を唱えるのが本質であることが既に判明した女性描写とは、正に歩調を合わせているのである。女性描写は、作品の重要な世界観をさらに強化するという重要な側面を有している。

Ⅲ

前節で明らかになった女性描写の意義を踏まえつつ、終末場面にも、男性と女性の明確な弁別的描写が登場する点に注目し、女性描写の本質にさらに肉薄したい。その最終場面において、ジョード家の成人4名と子ども2名は、豪雨の直撃を避けるために小屋に退避する。すると、そこには、重度の栄養失調で瀕死の見知らぬ男性がいた。餓死寸前の男性を前にした際の、ジョード家の成人男性2名の反応は、“. . . Pa and Uncle John standing helplessly gazing at the sick man” (618).、 と描写されている。彼らは茫然自失の体に陥るばかりで、事態に何ら対処できない。本稿ですでに確認してきた、男性の描写基調と調和する形で、非常事態を前にした際の男性は無為無策に陥っている。そのような男性二人とは対照的に、母親とロザーシャーンは、以下の引用の通り言葉を全く交わすこともなく、餓死しかけている男性に死産を経た直後のロザーシャーンが授乳するという、男性の命を救う方策を瞬時にして案出している。

> She [Ma] looked at Rose of Sharon huddled in the comfort. Ma's eyes passed Rose of Sharon's eyes, and then came back to them. And the two women looked deep into each other. The girl's breath came short and gasping.
>
> She said “Yes.” (618)

このように、終末部においても、突発的な事態に対して臨機応変に対応できない男性とは対照的な、非日常的な状況に適切に対応できる女性の様子が描かれている。

さらに、栄養失調で瀕死の状態の男性に授乳することにより、血縁関係にない男性の生命を継続させる方策を母娘が即座に案出する点は特段の重要性を持つ。なぜなら、この描写に先行する場面において、女性の行動の生産性の男性に対する優越性が生じる場は、既に確認した通り、大半が、家事の領域に限定されていたからだ。このような一貫性は、女性の活動の場を家庭内に限定されたものと捉える視点の追認と解釈されかねない。しかも、作品が執筆された1930年代の直前の1920年代において、アメリカの女性が置かれた現実にあっては、以下の指摘の通り、女性が家事に拘束される平均時間が増大していた。

> Yet despite all the new technology, the women surveyed by the Lynds claimed that they spent more, not less, time on housework in the 1920s than before. Indeed, the time had almost doubled, from 44.3 to 87.5 hours a week. Standards, it seemed, has risen. (Deutsch 59)

同様に、作品執筆時の女性の在り方は、“Women's added burdens during the Great Depression solidified their identification with the home and laid the groundwork for the heightened emphasis on domesticity in the postwar period” (Ware173). という形でも指摘されている。さらには、1910年代には、“women as competent housekeepers” (Banner 109) という女性像のステレオタイプが存在した点も指摘されている。また、1930年代の状況として、“ ‘[M]agazines like *Good Housekeeping*, its title, like its content, propaganda for a sentimentalized domesticity, extolled woman's home function . . .’ ” (Laura 75). という雑誌の記載内容の方向性も指摘されている。以上の、作品が執筆された当時の、社会が女性に関して当然と捉えていた在り方を視野に入れれば、女性が能力を発揮する場を家庭内に限定する捉え方は、既成秩序（この場合、明文化されていない暗黙の秩序）が女性に課す義務を追認する姿勢ともいえる。作中の女性描写が、女性が既成秩序から強いられている現状を追認する形態を取った場合、この在り方は、既成秩序の形骸化を目指している作品の基本姿勢と多大なる齟齬をきたすことになる。

しかしながら、最終場面においては、授乳という育児（家事）と不可分の関係にある行為が、見知らぬ成人男性の救命という、家事からは大きく乖離した、社会性が濃厚な結果を生み出す在り方が描かれている。その一方で、“But the new moral of this novel is that the love of all people—if it be unselfish—may even supersede the love of family” (Carpenter 246).、あるいは、“[The] insular family cannot sustain its members without recognizing the mutual needs it shares with others” (Gibbons 160). という、作品のメッセージ性が指摘されている。同様に、作品は、“ ‘this theme of consolation in human solidarity’ ” (Brasch 53) を伴っているとも指摘されている。このような、作品全体が提唱している、他者との連帯に基いて移民全体が行動すべしという、社会性が極めて濃厚な発想を、最終場面における女性二人の合意に基づいた行動は正に具現化している。しかも、男性は、女性とは対照的に、その理念を行動で全く体現できない点が強調さていた。そうであるならば、最終場面の描写には、女性の活動の有意性を、当時の社会における暗黙の了解が適任と判断していた家事や家庭内の営為の枠内から解放する方向性が見いだせる。つまり、女性の活動の場を家庭内に限定する既成秩序に対して反旗を翻す作者の姿勢の貫徹性を指摘できる。はやり、当時の合理性を欠いた既成秩序に反旗を翻すという作品の基本的なス

タンスに揺らぎは見られないことになる。

社会性が濃厚な人間活動の点で、トムと母親の関係に関して注目すべき描写がある。カリフォルニアに到着後、自警団の侮蔑的発言と接した際に、激昂して前後不覚に陥ったトムは、自警団の一員を殺害寸前に至る。その際に、怒りに根ざしたトムの粗暴性を抑制するのが母親なのである (381-82)。トムは従前より、一時的な感情に流されて衝動的に殺人を犯す性向を有し、それが原因で服役した経歴を持っていた。つまり、トムは、カリフォルニアに移動し、その結果、家族を取り囲む社会環境が激変した後も、従前の行動様式を維持しつつ活動している。母親の制止がなければ、トムによる自警団の一員の殺害は、銃で武装した多人数によって構成されている自警団（しかも飲酒状態にある）の、家族に対する致死的な暴力行為を惹起したはずである。このように、トムという一個人の行動様式の固定化は、家族全員を重篤な危機に瀕させるものとして描かれている。このような男性描写と女性（母親）の描写とを対置してみよう。

母親も従前は、怒りに駆られた際には対人に狂猛な粗暴性を発揮する人物であり、安易な殺人を犯しかねない、トムと同類の暴力志向を有する人物であった。この点は、以下の引用でトムが語っている、母親の過去の行状から明白である。

> “‘I seen her [Ma] beat the hell out of a tin peddler with a live chicken one time ’cause he give her a argument. She had the chicken in one han’, an’ the ax in the other, about to cut its head off. She aimed to go for that peddler with the ax, but she forgot which was which, an’ she takes after him with the chicken. Couldn’t even eat that chicken when she got done. They wasn’t nothing but a pair a legs in her han’.’” (64-65)

以上のような彼女の姿勢を読者が実際に目の当たりにするのは、旅程の途上で、家族を二グループに分割した形での、カリフォルニア到着を目指そうとする男性たちの計画を、やはり、父親に対する暴力行使を確固として宣言することによって母親が断念させる場面においてである (239)。かくのごとき、家族に対してすら発揮されかねない強固な粗暴性、暴力志向を有する母親は、カリフォルニア州に到着した直後に保安官補から侮辱的な対応をなされた際に、銃を躊躇なく使用する彼に対して、無謀にもフライパンで攻撃を加える寸前に至る (291)。しかしながら、彼女の従前の行動様式を視野に入れれば、それは、彼女にとって至極当然の振る舞いといえる。その際に、彼女は保安官補から、“‘Well, you ain’t in your country now. You’re in California . . .’” (291). と指摘され、さらには、“Okies” と呼称され、カリフォルニアにおける異人として処遇される。これらの体験によって、彼女は今いる場が以前とは別環境である事実を突き付けられる。この現状を認

識し勘案したからこそ、従来は奔放に発露させていた粗暴性を母親は発揮するどころか、カリフォルニア到着後には一変して、先ほど眺めたとおり、トムの粗暴性を抑制する行動を取っているのである。さらには、だからこそ、侮蔑的な対応を行った保安官補に対して今にも爆発せんとしていた粗暴性を母親は抑制し、攻撃を断念する形で、劇的な行動様式の豹変が生じるのだ (291)。

カリフォルニアに移民した結果、生活環境が激変した後も、従前の行動様式を省察なしに持続するトムとは対照的な、硬直性とは無縁の母親の行動様式は、まさに、家族を危機から救うものとして位置付けられている。このように、母親は生得の行動様式を柔軟に変化させているが、それは、とりもなおさず、家族が置かれた社会環境の激変を勘案した結果なのである。このような、家庭外の社会環境を意識した上で生じている母親の行動の柔軟性にも、家事に対する適性に決して留まるのではない、社会性の強さを指摘することがでる。さらに、母親は、女性全体の行動様式に関して、" 'Woman can change better'n a man. . . . Woman got all her life in her arms. Man got it all in his head' " (577). と指摘している。この指摘は、母親が見せた、家庭外の社会環境に即応する形で彼女個人の行動パターンを変化させるあり方を、女性全体によって共有される在り方へと敷衍するものである。このような形での、一般的女性像の導入から判断しても、暗黙のうちに存する既成秩序が女性に課した、家庭内を女性の活動の本質的な場と位置付ける在り方から、女性を解放せんとする作者の姿勢には、揺るぎない一貫性が認められるといえる。

Conclusion

『怒りの葡萄』に関しては、作品執筆時の作者の社会意識の旺盛さがよく知られている。特に、カリフォルニアに流入した大量の移民が置かれた、死に瀕する劣悪な状況に対してスタインベックが感じた義憤の念が作品の大きな執筆動機となっていた点は周知の事実である (Lisca 146-47)。既成の社会秩序が、そのような移民の悲惨な状況を生み出す元凶である以上、既成の社会秩序が本作の辛辣な批判の対象になるのは当然の帰結である。そのような、既成秩序に対する作者の批判的な眼差しが、女性を男性の下位に位置させるという暗黙の秩序をも、逃すことなく捉えたのが実情なのである。そのようなプロセスを経て生成された女性描写は、あくまで、既成秩序を批判するための方策としての側面が強いだろう。そのため、女性の能力の理不尽な矮小視や、女性が置かれた現状の不合理さを批判することが作品執筆の究極的な目的になっているわけではない。あくまでも、作品が批判の俎上に上げている、既成秩序がもたらす多種多様な不合理な在り方の一つとして、女性の能力を矮小化する在り方が遺漏なく取り上げられているのが実情といえる。

本稿で確認したとおり、移民の生死を直接左右する要素といえる、法律、警察、監獄といった制度化された既成秩序に対する批判は直接的に、読者が判読しやすい鮮明な形態で展開されていた。対照的に、男女の階層性に対する批判のメッセージを判読するには、離れた箇所の複数場面を総合

的に視野に入れることが必要となっており、いわば、迂言的な表現法が採用されていた。このように、二種類の批判においては、表現の直接性の点において濃淡が認められる。このような二つの在り方は、作者の創作活力が多数の移民が死に瀕している惨状への同情と不可分の関係にある中で、男女間の階層に関する既成秩序は、移民の惨状と直接的な因果関係を有していないことを考慮すれば、当然の結果といえる。しかし、移民の惨状への作者の同情の念が作品執筆の出発点となりながら、それとは直結しない、女性に関して当時の社会が至当と捉えていた既成秩序も、遺漏なく批判の対象として俎上に載せているのであり、この点において本作の女性描写に関する時代との相対関係における革新性を認めることができるのである。

Works Cited

Banner, Lois. *Women in Modern America: A Brief History.* Wadsworth: Thomson Learning, 1995.

Bloom, Harold, ed. John Steinbeck's *The Grapes of Wrath.* New York: Chelsea House, 1988.

Brasch, James. "*The Grapes of Wrath* and Old Testament Skepticism." Bloom 45-56.

Carpenter, Frederic. "The Philosophical Joads." *Steinbeck and His Critics: A Record of Twenty-Five* Years. Eds. E.W. Tedlock, JR., and C.V. Wicker. Albuquerque: U of New Mexico P, 1957. 241-49.

Deutsch, Sarah Jane. *From Ballots to Breadlines: American Women 1920-1940.* New York: OUP, 1994.

Ditsky, John. "Your Own Mind Coming Out in the Garden: Steinbeck's Elusive Woman." *John Steinbeck: The Years of Greatness.* Ed. Tetumaro Hayashi. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1993. 3-19.

Gibbons, Michael. "The Indifference of Natures and the Cruelty of Wealth." *A Political Companion to John Steinbeck.* Eds. Cyrus Ernesto Zirakzadeh and Simon Stow. Ken tucky: UP of Kentucky, 2013. 146-70.

Gladstein, Mimi Reisel. "The Indestructible Women: Ma Joad and Rose of Sharon." Bloom 115-27.

Hedrick, Joan. "Mother Earth and Earth Mother: The Recasting of Myth in Steinbeck's *The Grapes of Wrath.*" *Twentieth Century Interpretations of* The Grapes of Wrath. Ed. Robert Con Davis. 134-43.

Laura, Hapke. *Daughters of the Great Depression: Women, Work, and Fiction in the American 1930s*. Athens: U of George P, 1995.

Lisca, Peter. *The Wide World of John Steinbeck*. New York: Gordian Press, 1981.

Mckay, Nellie. "Happy[?]-Wife-and-Motherdom: The Portrayal of Ma Joad in John Steinbeck's *The Grapes of Wrath*." *New Essays on* The Grapes of Wrath. Ed. David Wyatt. New York: Cambridge UP, 1990. 47-69.

Steinbeck, John. *The Grapes of Wrath*. New York: Viking Press,1939.

Ware, Suzan. *Modern American Women: A Documentary History*. New York: McGraw-Hill, 1997.

ISSN 1347-0728

JOURNAL
OF
THE FACULTY OF HUMANITIES
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU

No. 83 March 2014

CONTENTS

Idiosyncratic Representation of Female Characters
in *The Grapes of Wrath*
… Johji MAEDA

The Department of Comparative Culture
The Faculty of Humanities
The University of Kitakyushu
2 0 1 4